

幼児の心理療法 (五)



玉井 収 介

内気な引込思案な子どもの場合でも原則としてそれほど差があるわけではない。しかし、こちらの態度として注意しなければならぬのは、ややもすれば先走りしがちなことである。

たとえば、相手が元気よくあそばなかったり、口もきかずにだまりこんでいたりすると、何とかして活発にあそばせよう、話をさせようというあせりにおちいりやすい。

つぎに二、三の例をあげてみよう。

ある治療者は、子どもの問題行動の原因が、親子関係にあると確定して、ドル・ブレイの中にそれがあらわれるのを期待したが、子どもはあまり興味を示さなかった。

そこである日、他のおもちゃをとりはらってドル・ハウスとドル・ファミリーだけにし部屋中央に出しておいた。それでもあまり

あそばなかったの、

「どう、これおもしろいのよ、他の子もあそんだのよ、あそんでみない？」とさそいかけた。

このようなやり方はどうみても行きすぎである。

この治療者も最初のストラクチュアリングの際に、「この一時間は何をしてすごしてもよい」ということを伝えているはずなので、それならば子どもがだまりこくってすごすこともまたみとめられなければならぬ。ましてあるおもちゃがおもしろいかおもしろくないかは、全く子ども自身がそう感ずるかどうかであって、こちらから押しつけるべきものではない。

このような失敗は、一旦元気よくあそんだ子どもが、次に、不活発になったりしたときにおちいりやすい。治療者は、ややもすると、その不活発さが、自分が何かヘマをしたのではないかという不

安をいだからである。しかし、子どもからみれば何か元気になれない理由があるのであるから、その気持をうけ入れてやるが必要なのである。

次に一つの例をかかげておこう。

小学校一年生の女児、母親につれられて来所した。精神薄弱だと教師も親も信じており特殊学級に入っている。就学を一年おくらせたが、それでも全然友だちとはあそべなくて、ひとりて一日中人形をいじっている。人のいうことはわかるがうまく口がきけない。お菓子を買いにいってもできないし、鉛筆もうまく使えない。学校はいやがらないが、ひとりではいけない。もちろん勉強は何もできない。

妹のものを何でもとりあげるのが、自分のものは決して貸さない。

以前には歌もおぼえたがこのごろは忘れていくようだ。

あるところでテストしてもらったら知能年令三才六か月といわれた。

出産は普通であったが、生後五か月と二才のとき、肺炎にかかり危険な状態までいった。その後もかぜをひきやすかったので、五才ごろまで、外に出さないようにしていた。

歩きはじめ一年、お誕生日からおしっこを教えた。こういう状態は保育園のころから同じである。

家族関係はやや複雑であるが今それは省略する。

この子の治療が開始されたのは精神薄弱ではないという見通しからである。といつてはいいすぎかもしれないが、精神薄弱と断定することはできないという判断からである。

どうしてその判断がなされたか。

こんな状態だからテストはもちろん満足にはできなかった。用具の中のお人形をだきしめてほほずりしているだけである。むりにテストすれば三才六か月という数字も当然であろう。

ただ、注意すべきことは、ブレイ・ルームへさそったとき、「何をするの」と非常な不安をみせたときの様子である。そこには少なくも、これから何をされるのかという点について予感している様子がみられたし、そのことは断片的ではあったが、片言でも幼児語でもなかった。

母親からはなれないのでいっしょに入室させ、二、三はなしかけてみると、こちらのいうことはよく理解する。しかし返事はせず母親の顔を見て、母親に返事をうながす。そして母親が代つてする返事をだまっていっている。

人形をだいている態度などは、非常に幼児的という態じはするが精神薄弱らしいとは思えない。それに、五才まで外へ出さないように育てたこと、発語、歩きはじめ、おしっこを教えた時期などの乳児期の発達が比較的早かったことなどを考えあわせて、精神薄弱と

断定するのをちゅうちょしたのである。

こうして治療がはじめられたのである。

一回目と、二回目は、あそびはほとんど人形を中心にしたものである。

動きは非常にゆるやかであるが自発的である。ミルクのみ人形におむつをはかせたり、スカートをはかせたりしている。一番小さい人形を、「これお人形のお人形ね」といって、大きい人形に抱かせたりする。

二回目になると少し活発さを増してくる。家具類、ドル・ハウスを示してやると、ミニチュア・セットのベットをうらがえしにして人形の枕にしたり、「男の子はお父さんと、女の子はお母さんと」といって別々に部屋にねかせたりする。

くまのぬいぐるみをトラックにのせ、ぞうに押させて歩く。くまとぞうは、しばらく考えておじいさんといっしょといっしてその部屋にねかせる。

こうしたことを何回もくりかえしている。前回より声も大きくなり笑い声も出てくる。

幼児的な印象はいちじるしいが、精神薄弱的なところはうすれてくる。

終って外へ出て、母が、「さようなら」とあいさつさせようとすると押しだまって母にくっついてしまう。

三回目には、あそびの種類はやはり人形やくま、ぞう、それにドル・ハウスなどであるが、少しづつ範囲がひろがり、活発さが増してくる。

話も多くなってくる。声は小さいが、片言や幼児語ではない。

精薄ではないという印象がよくなってくる。

四回目も同じような経過をたどっている。

一方母親の方は、一回目、二回目には、妹がしっかりしている、姉は妹の世話をよくみる、とばかり話している。六才でじんぞうが悪くした。そのころから知能もおくれていたが、就学猶余の届は身体のことにおこうと医者にいわれた。

三回目、四回目には、こちらに来た次の日はおとなしいといっている。

三回目には、学校はおもしろくないというが、いっている。やはり休ませずにいかせたらいいのだろうか。一体ここへいつまでかよったらよくなるのだろうか。

精神薄弱施設の話を書いたが、そういう施設はたくさんあるのだろうか。ここで、「おあずけになりたいのですか」ときくと、「そうじゃないのです。しかし、同じような子のいるところに行けばずっとほがらかになると思う」といっている。

このあたりの母親のことばにはこの子に対する拒否的な感情があらわれている。否定してはいるけれども、施設にあずけてしまいた

い気持が少なくとも底流にはあるのであろう。同じような子どもの中ならおちつけるだろうというような特殊学級がそれに当るわけなのに、金がかかりすぎるといつてこの直前に特殊学級をやめさせているのである。

四回目には、まだ効果はあらわれなにか、いつまでつづけたらよいのか、ほかの子もこうやってつれられてくるのか、などといった治療そのものへの疑問が出てくる。それとともに、前に相談したところでは三才六か月といわれた、とまだそれにこだわっている。こちらの見解は、はじめのまえに話してあるわけで、それが全然通じていない。うがった見方をすれば、そのくらい低ければひと思いにあずけてしまえるのに、といわんばかりである。ただ、こちらへきた翌日はおとなしいと多少の変化のみえはじめたことをみとめている。

このような母の拒否的な態度が子どもに反映して、お人形をかわいがり、母に甘え、そして妹をいじめるのであろう。

五回目になって、子どものあそびはままごとに発展した。あいかわらず幼児的ではあるが精薄とは思えない点がはつきりしてきた。

一方母親も、先週あたりから大分よくなった、といいはじめた。

この間、朝、クズクズしていたので、妹の幼稚園についていつて

かえてみたら、ひとりでランドセルを背負って外で待っていた。こんなことはいまだかつてなかった。

ある日、かえりに雨がやんで傘を忘れてきたが、ひとりで取りにいった。

名前をよんでもよく返事をするようになった。……

妹の幼稚園の方を重くみるところにはこの母のこの子への感情がはつきり示されている。しかし、ともかく、はつきり効果のあらわれはじめたことを母親もここでみとめるようになっていたのである。

以下の経過は省略する。

この例でも、治療者は別に、これをしなさい、あれをしたらなどとすすめることはしていない。そういうことをされないと確信してこそ、子どもははじめてすきなようにあそびはじめるのである。そしてそう信じられるためにはそれを経験することが必要なのである。

次には、これらの例から、ふたたびいくつかの原則をぬき出して、くることが、及び、このような技術が、果して、保育の場面でどのように応用できるものなのか、について考えるでしょう。

(国立精神衛生研究所)